

	<p><b>エッセイ</b></p> <p><b>サッカーと野球と</b></p> <p>SCE・Net 弓削 耕</p>	<p>E-23</p> <p>発行日</p> <p>2011/2/21</p>
-----------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------	-----------------------------------------

鮮やかなボレーシュートが決まって、漸く延長戦に終止符が打たれ、2011年サッカー・アジアカップでの日本チームの優勝が決まった。長友選手の巧みなクロスを取った李選手が左足で強烈に決めたシュートがネットを揺らした。同じことをやれと言われても容易には再現できないような見事な連携プレー、ゴールであった。

今回の日本チームは練習不足なのか、チーム結成後の時間不足か、リーグ戦の当初にはなかなか調子はでなかったが、試合を重ねるにつれて粘りが出てきて、先行されても後半に逆転するようになっていった。従来の日本チームは、シュートが少なく、遠慮がちなサッカーであったが、去年のワールドカップの頃からは攻めの姿勢が見られるようになり、イタリアからのザッケローニ監督になってからは点が取れるような期待が高まり、見ても退屈な時間が少なくなった。以前はロスタイムとか、最後の最後の詰めが甘く、結果的に苦杯をなめることも多かったが、今回はゴールキーパー川島の健闘もあり、はらはらしながらも勝ちを得ることができた。ファンは眠い目をこすりながら我慢した甲斐があったし、翌日から暫くマスコミ報道はサッカー一色になった。アジアカップはワールドカップに比べれば規模の小さい大会で日本でも余り注目されていなかったが、ワールドカップで日本も少しは増しな成績を残せたこともあり、今回はかなりの盛り上がりとなった。久しぶりに日本人に元気を与える、全国的に明るいニュースをもたらしてくれた。

このように急に強くなった？この原因はいろいろと取り沙汰されている。その一つにザッケローニ新監督の手腕が上げられている。作戦面のことは良く分からないが、素人目にも攻めの姿勢が強くなったように思える。しかし何といても、優勝できたのはチームの和を大事にしたことのようなのだ。サッカーもチームプレーであるから、選手が一致団結して戦うことが必要で、過去の強豪外国チームでも試合中にチームがばらばらになってあけなく敗退した例もある。人の和というと、聖徳太子の昔から日本人の特性のように考えられていたが、最近ではやや失なわれかけていた。それをイタリア人がよく思い出させてくれた。監督はチームの1人1人の把握に力を入れ、切磋琢磨させ、控えの選手までにも心遣いをし、意思疎通に努め、チーム一丸となって戦えるようにしていたと言われる。この結果、主力選手が怪我で出場できなくても、控えの選手でカバーできた。その中で最たる者が決勝シュートの李選手であった。自分さえ良ければという傾向が強いなかで、組織として活動するにはチームの和や団結力が大切であることを知らしめてくれたように思う。ザッケローニ監督は日本の国の素晴らしさも称えていたし、特に学校教育でスポーツを取上げているのに感心していたのに興味を覚えた。

それに代表選手の半数が海外のチームで活躍しているのにも特徴があった。サッカーに

関して日本は残念ながら後進国であり、技を磨くには世界一流の選手が集まる欧州のチームでもまれるのが必要であろう。それらの海外組がチームの中心になっており、彼等がそれぞれ腕を上げていたのがチームに貢献した。海外での方が報酬も高いし、海外でも日本人の素質を認めてきているので、相互にメリットがあり、まだまだ海外流出が続くであろう。J1 ファンにとっては淋しいところもあるが、暫くは我慢ということであろう。逆に海外からの選手がJ1で活躍したり、日本に帰化する選手もいるので交流を楽しんだら良からう。また今回の監督は日本人ではないが、日本人も技術、作戦、マネージメントの力をつけて、どしどし日本人監督が出てくることも期待したい。

海外で日本人が活躍するスポーツといえば、野球もある。こちらはサッカーより歴史は古く、村上、野茂選手以来、数多くの選手が海を渡っている。世界の一流選手と競いたい、高い報酬を得たいという日本選手の希望があり、海外のアメリカでも球団数に対して選手が少ないので、日本で活躍した選手をスカウトしたいという、両者の希望が合致し、一時はブームのようになったが、最近はやや熱が冷めている。現在活躍しているのはイチロー選手だけといってもよいほどで、他の選手は期待ほどには活躍していないからであろう。野球の場合はアメリカで技を磨いて日本で活躍するというのではなく、日本で大活躍している選手がこれからというときに海外に出ってしまうのでファンとしては失望してしまう。日本がアメリカへの人材供給、マイナーリーグのようになってしまうのが残念に思える。その上、TVのスポーツ放送ではメジャーリーグが先で、中継放送も多いのに、日本のプロ野球報道は2の次というのは納得できない。マスコミも日本のスポーツをもう少し大事にして欲しい。日本の野球は、アメリカのベースボールとは違うが、ワールドベースボールクラシックでしばしば優勝していることから、かなりの面ではさほどの力の差があるともいえないので、全面的にアメリカの支配下に入るのは納得のいかないことでもある。しかし、アメリカは世界一流の力のある選手が多いので、一緒にもまれていれば得るものも多いのは確かである。渡米の機会を得ている選手は切磋琢磨して、その中で良い技やシステムを日本へも持ち帰って欲しい。

野球と言ひ、サッカーと言ひ、日本と世界とは相違がある。身体の大きさ、体力に差があるのは如何ともしがたく、埋められない差がある。日本人の体力も向上してきているが、身長、体重などの体力差はサッカー、ラグビーなどでは如実に現われる。それを日本人は技術の細かさや器用さでカバーしている。オリンピックなどでも体力勝負となると残念ながら苦杯をなめることが多い。これは宿命であるから日本チームが成績を上げるには、日本人の考え抜いた細心な技、器用さやチームワークを生かしていくのがポイントとなる。その都度、工夫を重ねていけば、良い成績を上げられる可能性も大きい。

スポーツの世界では、海外に出るのは比較的活発であるが、その他の分野、特に学問、教育、企業の分野では国外に出て行きたい人が少ないのが問題になっている。スポーツのようなインセンティブがないからであろうか。かつてアメリカを始め、海外留学や海外勤務などは若人の憧れの的であったが、最近では人気がなくなり、中国、韓国などと比べて

海外へ出る人が少ないのが指摘されている。従来とは状況は変わり、日本も比較的環境がよくなり、あえて苦勞しなくてもそれなりの成果が上げられるから海外に目が向きにくくなったのであろう。学界では帰国後の処遇や閉鎖性も問題として挙げられているが、もう少し世界に開かれることが必要なこともあろう。野球やサッカーのように帰国者にも広く活躍する場を用意しておくことも望まれる。またスポーツの世界と異なり、学界や産業界のことはマスコミなどで取上げられることは少なく、一般の人には与えられる情報も乏しく、教育の問題もあろうが、特に青少年に魅力のある世界として多くを知らされていない。しかし、産学とも世界で一番を目指すには世界一流の人が集まるところで、切磋琢磨するのが必須であるし、実力も伸ばせる。努力して挙げた成果が海外の人々にも認められ、世界に貢献しないと、世界一流の企業とはならないし、ノーベル賞などで世界的に評価されないであろう。特に科学技術、学問の世界では一番を目指し、超一流でなければならないのである。

国際化時代においては、学問、科学技術、企業、スポーツの分野でも、日本人が世界に伍して活躍して行くことが熱望される。日本で一流となることを目指し、そして世界でも一番、超一流になることが、これからの国際化時代を生き延びて行くのに必要ではないだろうか。高い志を持ち、刻苦精励し、各人それぞれが得意の分野で成果を上げていくことが望まれる。

以上